言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　坂井　洋史
論　文　題　目　　『懺悔と越境―中国現代文学史研究』
（単著、汲古書院[東京]、2005 年 9 月 10 日刊行）
学位取得年月日　　2006 年 3 月 22 日

１．本論文の構成

本論文『懺悔と越境―中国現代文学史研究』は、中国の現代文学（本論文および本要旨では、中国における一般的な用法に従い「現代文学」を用いるが、その意味は「近代文学」とほぼ同じである）はどのような特質を備えているのか、そのような文学から構成される中国現代文学史は如何にして記述され得るか、という原理的な問題を考察し、この問題に対する論者の見解を提示したものである。更に具体的にいえば、「中国現代文学史」というテクストを、理念的には想定し得る「全体」の断片に過ぎない「事実」を、恰もその総和が「全体」であるかのように羅列することで、膨張の一途を辿るしかないような、「モダンな」テクストとしてではなく、また、それとは逆に「全体」を先験的に措定した上で、「全体」の合法性を保証するために、「事実」に対して強く「排除」の機制を働かせた恣意的なテクストとしてでもなく記述することは果たして可能か、という問題に関する思考を展開したものである。

本論文は、A5 版本文 486 頁、主要参考文献 11 頁、索引 13 頁からなり、以下の各章から構成されている。

序　章　「巴金」のいない現代文学史

第一章　一九九〇年代中国の文化批評――「近代論」と文学史研究の構想

第二章　懺悔と越境　あるいは喪失の機制――中国現代文学史粗描の試み

第三章　想像の中国現代文学――竹内好における「文学」の行方

第四章　都市文化としての大衆音楽――当代中国における大衆音楽解読とモダン理解の限界

第四章補論　中国ロックは如何に「読まれるか」

第五章　「原野」と「耕作」――初期白話詩習作に見る「人文的関心」と「模倣」の機制

第六章　中国現代文学者の言語意識とモダン認識の限界

第七章　文学言語の「自然」と第三代詩の「口語化」をめぐって

終　章　文学言語のモダニティをめぐる対話へ

あとがき

主要参考文献

索引（人名、書名、事項）

２．各章の内容

本論文の構成は、概ね前掲章立ての順を追って、上述の「思考」が展開していく形を採っている。以下では、各章の内容の概要を示す。

序章では、従来の文学史テクストが依拠した二種類の主要な原理、即ち「実証性」と「主観性」を考察の対象とし、前者を標榜する文学史研究が、歴史の「全体」を無数の「事実」に断片化し、「断片」の総和が「全体」であると予定しながらも、実は、未開の「フロンティア」が不断に開拓されることで現われる新たな「断片」が、「全体」を最終的な「不在」へと棚上げしてしまう、いわばモダンの属性ともいうべき飽くなき自己拡張性と親和するものであること、一方、後者に拠る文学史は、「全体」の明晰を、明晰に翳りを落とす「事実」を強く「排除」することによって獲得するが、同時に恣意性の烙印を免れ難いことなどを指摘した。論者は、前者の立場に傾斜する研究、例えば個別作家の「実証的」研究や、様々に開発され続けている方法論を援用したテクスト分析を主要な姿勢とする研究を「内在研究」、後者を標榜する研究、例えば唯物史観の文学史研究への機械的な適用、即ちある時期まで中国大陸の文学史研究を支配した、過度にイデオロギー化し、硬直した研究を「外在研究」と定義し、論者の構想する文学史研究、およびそれが結実した際に記述されるであろう文学史テクストは、両者をある種の緊張感のもとにバランスよく融合させることを目標とする旨明らかにした。また、その作業は、現代中国における「文学史という言説」を特徴づけた思惟の在り方を対象化し、一種の「構造」と捉える思考に支持されるであろうとし、ここで所謂特徴的な「思惟の在り方」を、「現代文学」を規定する「現代」＝モダンに対する理解の「特徴」に窺うことが、次章以降の主要な関心となることも、併せて予告した。

第一章は、序章での「予告」を承け、作家、文学者を含む中国知識人の、前述思惟の在り方の「特質」は、彼らのモダン／モダニティ／モダナイゼーション理解の上に見出し得るとの仮説に立ち、特に一九九〇年代の文化批評領域において、モダン／モダニティ／モダナイゼーションが

どのように理解されていたか、一般的には文化批評という範疇に帰せられる言論を、できるだけ多く検証し、整理した。近現代中国知識人のモダン理解は、それらが海外列強の侵略や分厚い封建伝統の影響といった、抑圧的な現実のコンテクストからの離脱を実現する「進化」と観念されたがために、却って一面的なものになったと論者は理解する。モダン／モダニティ／モダナイゼーションは、そもそも解放の契機という一面（自由、平等への志向）と、新たな抑圧の契機という一面（人間の道具化、アイデンティティの不安定状態）を併せ持つ、両義的、逆説的な概念であるにも関わらず、中国知識人は後者の一面を厳しく対象化してこなかった、そして、それを「現代／現代性／現代化」と翻訳して、「中国化」したのだと、論者は考えた。このようなモダン理解は、一九九三年に上海で開始された「人文精神討論」を皮切りに、市場経済や大衆社会の到来を福音と考える議論、ポストモダニズムの視点から中国社会のハイブリッド状態を肯定する議論など、様々な議論を経過して、一九九七年に発表された汪暉「当代中国的思想状況与現代性問題」に至り、漸くその理論的混乱状態およびモダン理解の一面性から脱したというのが、整理を終えて得られた結論であった。また、最後に、序章において目標に掲げた「新たな文学史」テクストが、様々な文学テクストに反映しているはずの、作家のモダン理解の一面性を、構造的に把握することによって記述され得るとの見通しを、更に具体的に記した。ここで、これまでの中国の文化・思想界においては、日本におけるような「近代論」が欠如してきたと、より明確に指摘した。

第二章は、前章で予告した「新たな文学史」テクスト記述の可能性を、実際の形として示した。即ち、論者が将来において、より多くの文学テクスト、作家などに言及しながら、「文学史」と銘打つに相応しいテクストを記述する際、その大枠に据えらるべき方法論とスタイルを、試みまでに縮図として示したものである。ここでは「懺悔」「越境」といった自前の概念を設定し、中国知識人が自らを規定している共同性を対象化することなく、無自覚の完全な自己否定（「懺悔」）を代償に、共同性の外部に想像した「真理」へ、主観的にアイデンティファイしていく（「越境」）という思惟上の特質を、五四新文学以来の文学テクストに窺い見た。そのような「特質」は、実はある特定のコンテクストにおいてのみ顕現したものではなく、五四新文学初期のテクストと、一九八〇年代「新時期文学」のテクストのように、時代を隔てたテクスト同士にあっても共有され得ることを、「現代作家」の郁達夫、張聞天、謝冰心と「当代作家」の張賢亮、賈平凹といった、時代を隔てた作家のテクスト、および五四時期の白話詩を例に考察、それが中国知識人の思惟構造の深部に横たわり、頑強に存在し続けたメンタリティの表現だったと指摘した。そして、そのような自己対象化の欠如が、モダン理解の一面性とも通ずるとして、前章で提示した仮説を展開させたのである。

第三章は、竹内好を論ずる体裁を採りつつ、中国現代の文学者が、必ずしもモダンの一面的な理解に止まらなかった、例えば茅盾や葉聖陶のような文学者は、その文学的感性を頼りに、モダンの両義性、逆説性を直覚的に察知していたとの指摘を行った。第一章でも触れたことだが、中国の文化界は九〇年代末になるまで竹内好流の「近代論」を持たなかったと論者は考える。しかし、竹内は自らの「近代論」の完整を求める余り、中国現代文学史の「脈絡」を設定する際に、

持ち前の「素地」としての「文学観」を「排除」したということを、その中国革命における「個と全体」を巡る思考を手掛かりに指摘した。具体的には、竹内が関心を寄せていた二人の中国作家、趙樹理と葉聖陶のテクストを、論者が分析し、それを竹内の解読に対置させることで、その解読の偏頗を炙り出したのである。前述のように中国知識人における「近代論」の欠如、一面的なモダン理解を明らかにする作業は、論者の構想する文学史研究において重要な一環を成すものだが、それは、一方で、中国の「近代論の貧困」をあげつらい、一方的に批判するばかりでなく、茅盾や葉聖陶らが示した文学者＝「モダンの見者」としての「鋭敏」の存在を銘記しつつ、竹内の「主観性」、ひいては我々の「過剰な近代論」の限界を認識し、これを相対化することを前提とするのである。その意味で、この章は、第二章を補足すべき原理的な考察ともなっているのである。

第四章およびその補論は、大衆音楽、しかもロック音楽を取り上げたという点、さらにロック音楽の「大衆性」を定義する際に、それが由って生まれた所の社会背景を説明すべく、初歩的なデータ類を援用したという手法の点で、他の各章とはやや調子を異にしているかもしれない。ただその眼目は、中国知識人が未知の認識対象を、自らに切実な関心の範囲の中で、手持ちの人文性を根拠に「解読」しがちであるという「人文性解読」の傾向を指摘することにあり、やはり、本土の知識人にはなかなか対象化されない、思惟構造上の特質を論じたものであった。しかも、そのような特質は、ロック音楽や大衆文化といった「新生事物」のみならず、モダン／モダニティ／モダナイゼーションに対する理解にも反映しているはずであり、その意味では、この章における考察は、前章までの議論と関連しているのである。「人文性解読」という概念自体は、論者の杜撰に係るものであるが、そもそも「音楽」という非言語を言語化して考察すること自体が、究極の不可能を見据えて「敢えて」行われるべき行為であること、崔健という「ロック」歌手が、「叛逆」を看板に掲げつつ、終に「ロック」という制度自体には「叛逆」しないこと、こういった事態に想像力が向かないのは、「終末論の不在」とも呼ぶべき、全てを「人文性」に拠り理解可能とする中国知識人の思惟の在り方を示すものと考えての命名であった。

第五章では、第四章で指摘した「人文性解読」の具体的な表現例として、テクストを実人生や現実に直結させる文学観が、新文学初期から存在したことを、五四時期に無名の一青年が書いた白話詩習作と、それに対する教師の添削、指導を材料に検証した。しかし、テクストそのものの構造よりも、文字上に現実が如何に反映しているかを重視する観念は、それを具えただけでは、テクスト制作の実際を助けはしない。そこへ滑り込んできたのが、先行して、権威化したプレテクストの模倣という機制である。この模倣は、既成の言説の受容ということであり、となれば本来的には実人生の「リアリティ」を尊重する文学観と矛盾、衝突するものであることも、併せて指摘した。この白話詩習作を書いた人物は陳範予という教育者であり、その遺稿は、一九八七年に論者が調査を開始し、一九九七年にはその内の日記部分を公刊している（「参考論文」に掲げた）。詩稿は陳範予遺稿において、日記に次ぐ分量を占める重要な資料であり、公刊は、本章の

前身である雑誌掲載版はあるものの、このように整った形では初めてといってよく、その資料的価値に鑑み、原文を併せて提示した。

第六章では、「人文性解読」が、文学における「人間的興味」の強調（「内容」の重視）を導き、テクストの「透明化」を要求すること、その結果として、テクストおよびその主要な要素である「言語」に対する意識の希薄という偏向（「形式」の軽視）を醸成すると指摘した。そして、このような言語意識の希薄が、言語のイデオロギー性に対する「鈍感」に繋がることを、葉聖陶の標準語＝「普通話」擁護、言語の規範化の要請に従った旧作の改訂を通じて検証した。いうまでもなく、言語の規範化（現代中国にあっては「普通話」の制定と、政治権力を背景にした強制的な普及）とは、モダナイゼーションの重要な環節を成すものだが、葉聖陶は、「個と全体」を巡る思考においてはモダンの抑圧的な側面を鋭敏に察知し得たにも関わらず、「普通話」の表象するモダニティとその抑圧性については鈍感な姿を露呈したのである。それが中国現代文学における「内容重視／形式軽視」の伝統に由来するものであろうとの見解も、ここでは示した。葉の旧作改訂の実態検証に当たっては、二種類の版本を対照させる体裁を採った。ごく短い小説にも関わらず、改訂箇所は極めて多く、対照表は煩瑣になったが、葉の普通話に対する「投降」の徹底振りは明らかになったであろう。

第七章は、前章で関心の前景に現れてきた、モダンの表象としての「普通話」について、更なる考察を加えた。ここでは、一九八〇年代後半に中国詩壇を席巻した「第三代詩」が、「普通話」のイデオロギー性を拒んだ結果として、「個人的」で「自然」な「口語」を詩語に採用すると標榜したこと、その「言語」に向けた強い関心が、これまで考察の対象としてきた、中国知識人に特有の思惟構造とどのような関係にあるのか、実作および詩論を概観しながら検証した。前章で検討した葉聖陶の「鈍感」を、少なくとも主観的には「克服」した世代が、イデオロギーによる抑圧も相対的には緩んだ時期にあって、果たして「詩」という「制度」を擁護するのか、あるいはそれもまたモダンの表象としての「近代文学」の一翼を構成するものと考えて解体するのか、その分岐を見極めようとしたのである。実際、「第三代詩」には、「抒情」に拠って前者に傾く一派と、ポストモダニズムを標榜して後者に傾く一派が相乗りしていたのであった。彼らが、実作面での成就の如何は別としても、言語のイデオロギー性、モダンの表象としての規範言語といった問題にまで、その関心の射程を伸ばしていたことは確かで、そのような先鋭性が、中国現代文学の終に脱し得なかった「内容重視／形式軽視」の伝統、ひいてはモダンに対する一面的な理解という「共同性」をすら相対化する契機になるかもしれないとの見通しを、ここでは示したのである。

終章は、前半でそれまでの七章の内容を要約し、後半では張新頴復旦大学教授を相手に、張[火韋]の長編小説『醜行或浪漫』における作家の言語に向けた関心の評価を巡り討論を行った。後半部分は、本論文の結びとして相応しい内容を持つということで、そもそも独立した一篇として発表されたものを接合したものである。本論文の概要は前述の通りであり、即ち、本論文に一貫する「筋」とは、中国知識人におけるモダン理解の一面性という思惟構造の特質を、そのような

問題と端的に関連する言論、テクストを通じて、直接に検証することから、それがテクスト意識や言語認識へ如何に反映されたかを検証するという具合に、検証の角度を変更し、関心を絞り込んだこと、もしくは展開させたことを指していうのである。「モダン理解の一面性」といい、「思惟構造の特質」といい、それに慣れ親しみ、取り巻かれ、規定されている当事者＝中国知識人には自覚化、対象化されにくい「共同性」を、国外の「傍観者」ならではの視点から指摘することが、本論文の基調に据えられている。そのような指摘は、道徳的批判でないことは無論、モダナイゼーションの現実的達成およびモダンに纏わる思考の「先進性」や「優位性」に拠り、自らが「中立的」な高みに立つことを強調することでもない、専ら「文学史研究」の新たな切り口を模索し、それを本土の文学研究者と共有することで、「対話」の糸口にしたいという動機に出たものなのである。生身の「中国」が既に近い存在としてある年代に中国研究を開始し、そこに生きる中国知識人と親しく接触し、議論を交わす過程で、「中国」イメージを形成し、認識を深めてきた論者にとって、そのような「対話」は、単なる理念やお題目としてではなく、研究の立場の基礎に据えられるべきリアルな「方法論」であり、そのような認識と一種の「覚悟」の表明として、終章にはこのような「対話編」が必要だったのである。

３．本論文の成果と今後の展望

本論文は、中国の知識人、文学者のモダン認識に窺われる思惟上の特質（モダンの一面的な理解）、およびそれが反映しているテクストや言語に関する意識を検証対象とし、そのような特質や意識の、テクストや現象における現れ方を捉え、それをある程度まで歴史的に系譜として辿ることで、新たな中国現代文学史を記述する際に拠るべき枠組が構築され得るとの見解を示したものである。文学史研究を標榜する以上、学術研究に必要な実証性や中国固有の問題の懇切な理解に配慮しながら、瑣末な事実の堆積に終始せず、一方で、外在的な方法論や言説への安易な依拠をも戒めつつ、同時代的な関心に強く裏打ちされた文学史研究の可能性を提示したものである。このような特徴を具える本論文は、近年我が国において単行本として刊行された中国現代文学研究には見られない、理論一般化への志向と、一定の実証性を兼ね備えた成果であると考える。また、本論文の基本である問題意識を広く学界に問うこと、更にはそれを中国本土の研究者にも投げ掛け、対話の話題を共有することで、学術の国際交流に貢献することも、その目標として意識されている。

九〇年代後半以降、中国では、十九世紀半ば以来の、内外の抑圧に抗しつつ目指された近代国家建設と中国革命の関係、社会主義実践とモダナイゼーションの関係等の問題を巡り、様々な議論が出現した。八〇年代近代化論が、モダナイゼーション＝解放＝世界化＝富強化／社会主義・文化大革命＝抑圧＝前近代的、と理解したのに対し、昨今の議論は、モダンが本来、解放／抑圧の双方の契機を併せ持つ両義的、逆説的な概念であると理解し、従来はモダナイゼーションの対立面にあるとされた中国革命や社会主義建設を、中国独自のモダナイゼーションの試みと解釈するようになった。この種の考察の代表が、汪暉「当代中国的思想状況與現代性問題」（一九九七）だった。この変化は、九〇年代に市場経済が導入され、八〇年代流の「現代化」が体制批判の根

拠とした西欧言説をも体制イデオロギーが取り込むという、「九〇年代アイロニー」を契機に顕在化した。本論文ではこの変化を、中国文化学術界における画期的現象とする立場に発し、モダン認識の変化は、モダンを支える制度として構築された現代文学に対する認識をどのような変えるか、変化した現代文学認識に拠る文学史テクストは、どのような性格を帯びるか等の問題を考察したのである。即ちモダン認識に窺われる中国知識人の思惟上の特質を手掛かりに、それをテクストや言語に関する意識の検証にまで発展させることで、新たな文学史の枠組が構築され得るとの見解を系統的に展開したのである。ただ、モダン認識の深まりを見せる中国の学術界にあっても、そのような認識の深化を、現代文学史研究という専門領域のテーマに反映させた研究は未だ多くは出現していないと思われる。更に、本土の研究者には、自らは対象化しにくい思惟上の偏向的特質があり（例えば、第四章以降で指摘した「人文性解読」の傾向）、それを客観視できる国外の研究者としての優勢に拠り、問題提起的な性格を突出させたのも、本論文の特長である。八〇年代以来、同時代中国からの大量の情報の流入により、より実証的な中国像の再構築が可能になったことは確かだが、それに連動して、大きな枠組を据え、中国、中国現代文学を原理的に考察する研究は、相対的に軽視されがちのようである。同時に、西欧の文学・文化批評の方法論を機械的に適用し、地域固有の問題を幾分軽視する傾向も存在するようである。本論文は学術研究の要求する実証性、中国固有の問題性の懇切な理解にも配慮しつつ、瑣末な事実の堆積に終始することなく、他方、外在的な方法論への安易な依拠をも戒めて、中国現代文学とは何か、という大きな問題を展望する点を大きな特長とすると考える。

とはいえ、本論文では問題提起性と理論一般化に性急になった余り、終章で述べたように本土文学者、研究者との「対話」を希望しながら、基本的には彼らの「欠如」の指摘に終始し、自らは一種啓蒙的・中立的な立場を採って、自己相対化に関しては殆ど言及されていない。また理論的な枠組や方法論についての理解が表面的であり、一方で「文学史研究」を標榜しつつ、広範な目配り、より多くの作家やテクストへの言及を欠く点も欠陥として自覚されている。本論文の後を継ぐ展開として、この三方面それぞれについての更なる深化に留意しつつ、第二章で提示した文学史テクスト記述の可能性を発展させ、より充実した材料に基づく、新しい「中国現代文学史」テクストの実現が構想されることになろう。